（7）自然との関わり・生命尊重

自然に触れて感動する体験を通して、自然の変化などを感じ取り、好奇心や探究心をもって考え言葉などで表現しながら、身近な事象への関心が高まるとともに、自然への愛情や畏敬の念をもつようになる。また、身近な動植物に心を動かされる中で、生命の不思議さや尊さに気付き、身近な動植物への接し方を考え、命あるものとしていたわり、大切な気持ちをもって関わるようになる。

ちょうちょうの卵みつけた！

６月、もんしろちょうの小さな卵を見つけた。子どもたちがキャベツの葉をのぞきこみ、「先生！ちょうちょうの卵、ちっちゃい！」と、発見を喜んでいる子どもたちと保育者は、飼育ケースに卵のついたキャベツを移した。青虫がキャベツをよく食べ、日に日に大きくなっていく様子を見ながら、ちょうちょうになるまで、大切に育てた。

保育者の援助と環境構成

子どもたちに自然への関心や興味を高めたいと考えた保育者は、子どもたちが、身近な生き物と触れ合いながら、様々な直接的体験ができる場や機会をつくっています。ちょうちょうの成長の過程で関心や疑問に思ったことを学級のみんなで話し合った。また、自分たちで興味をもったときに、すぐに調べることができるように絵本棚に図鑑を用意し、好奇心や探究心の芽が育まれるように関わっています。

お米の栽培体験

６月、毎年地域の方から、米作りを教えてもらっている。苗を植える前に土と水を混ぜるしろかきの工程で「冷たくて気持ちがいいね！」「手が真っ黒になって手袋みたい！」と子どもたちは、土の感触をダイナミックに楽しむ。苗植え、稲刈り、脱穀、もみすりと、お米が成長し食べられるようになるまでを、自分の手で体験することで「お米って殻がついているんだね。」などと、お米への関心を高めていった。

保育者の援助と環境構成

保育者は、お米の栽培への興味や関心をもたせながら、継続してお米の世話をする楽しさと大切さが感じられるようにし、子どもたちへの共感にも心がけています。また、一粒のお米ができるまでの大変さを感じ、食べ物を大事にしようと思う気持ちや、食への意欲が育まれることを期待して、お米が食べられるようになるまでの過程を体験できるようにしています。野菜等、作ってくれている人がいることへの感謝の気持ちにもつなげています。

身近な動物の飼育

うさぎやカメなどの子どもたちが関わりやすい、身近な生き物を飼育し、触れ合ったり、世話を行っている園もあります。子どもたちの入園当初、小さな生き物たちとの触れ合いは、寂しさを癒してくれます。飼育ケージの掃除やえさやりなどの生き物たちの世話を通して、生きているもの、命あるものであることに気付き、どのように関わるといいのかを考えたりいたわりの気持ちを感じて、優しく関わったりする姿が見られるようにもなっていきます。